

現代短歌分類辭典

第九十九卷

津 端 亨 編纂

津 端 亨 編 纂

現代短歌分類辞典

第九十九卷

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

現代短歌分類辭典

99

昭和五十九年六月一日発行

定価二、〇〇〇円

著者発行
兼印刷者

津 端 亨

〒111

東京都台東区鳥越一丁目十一番八

発行所 現代短歌分類辭典刊行所

代表 津 端 亨

振替 東京 三十九三一四番
電話 〇三(八五二)九八六九番

次

(1)

家事
 いへーこそ
 いへけむり
 いへぐるみ
 いへぐみ
 いへくま
 いへきた
 いへーき
 いへがら
 いへがまへーせーり
 いへがまへーしーて
 いへがまえ
 いへかべ
 いへがはら
 いへかど
 いへがた

歌数
 一 一 一 二 一 一 一 一 四 一 一 一 二 一 九 一
 頁数
 " " " " 二六 " " " 二六 " " 二九 " 二六

家毎
 いへごもりーて
 いへごもりーづま
 いへごもりーつ
 いへごもりーあて
 いへごもりーつる
 いへごもりーつ
 いへごもりーする
 いへごもりーしーて
 いへごもりーしーつ
 いへごもりーけり
 いへごもり
 いへごみ
 いへごとーは
 いへごとーの
 いへーごとーに

歌数
 一 一 二 三 一 五 二 一 一 二 四 一 一 五 七 五
 頁数
 " " " 二六 " " 二九 " " 二六 二五 " " 二六 " 二六

いへし た	いへし	いへざ る	いへざ りし	いへざ らむ	いへざ ま	いへざ くら	いへさ き	いへご もれば	いへご もるら む	いへご もるな り	いへご もる	いへご もりを れば	いへご もりを り	いへご もりゐ る(連 体形)	いへご もりゐ る(終 止形)
四	一	四	二	一	二	五	一	一	一	一	五	一	八	一	二
二	五	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二
二	五	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二

いへた むろ	いへた ち	いへた だ	いへた から	いへた か	いへそ ら	いへそ ひ	いへそ と	いへせ ぬ	いへす る	いへす ち	いへす め	いへす ずめ	いへす ず	いへす ず(連 用形)	いへし ま
二	二	二	一	一	二	三	一	四	一	四	二	二	七	二	九
二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二
二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二

いへ〔名詞〕〔家〕

新藁で作つた男の生殖器にお灯明があげてあるこの家の土間の片隅③ 米田雄郎

入学期とことしもなりて家の子の中学生はかへりみ思ふや② 白井大翼

入院費を思ひ悩みてゐるらしき妻をはげまし家片づくる① 小泉 荃三

鳩も来て鶏と遊べり総の国大沼につづくかやぐさの家② 熊谷武雄

日本海くらき冬に來りてあはれ港の家にふた夜ねにけり① 鹿兒島 壽藏

「日本の桜の花」といふに今宵ゆきぬ美しさ花火空をいろぞる⑤ 斎藤茂吉

荷物みなはこばれゆきし家のうちひつそりとして雨のふる音①（朝霧） 奥貫信盈

庭付きの車もおける婿の家日当りのよく道角にあり 津端 亨

韭の花真白う咲きぬ乳匂ふ牧場の家に夏の雨して（新万葉集二） 大野郁子

煮るものの匂ふ家ありゆふぐれふる里みちを吾がゆくなべに（新万葉集三） 窪田 由紀衛

榆垣の根方しめりてこぼれ種のささげ萌えむぞ追はれ捨てし家② 山本友一

いへ

いへ

荷をやりて夕戸を閉しぬこの家に妻子は帰り来ることなし③

人間の血に太るものわれもまた負ひ来つ古き家と戦ひと①

仁治元年後嵯峨のみ代の僧忍性にんしゃう頼ほつすくふ発願に成りしこの家①⑥

軟草ぬえぐさに冬日あかるき丘ぞひのしら壁の門はうたびとのいへ①①

泥凜をなやみながらにくだりしも家にかへればはやなつかしき⑤

ぬけ出でしをしへの庭のわか竹は家のかぜをもふきおこすらむ

沼垂ぬつたりの闇の路地よりオリオン座低きを観つつ君が家訪ふ⑤
(新万葉集別)

ぬば玉の夜の更けぬればおのづから向ひの家の赤子も泣かず③

沼あさく晴れ、かへり咲く桜ある家の午前の日かげ①①

沼近き家にやどりて鴨の声きく冬の夜はあけずもあらなむ①

沼の家しるくぞ頭ち来はねつるべさるすべり馬小屋遊ぶにはとり③

沼の辺の家に鯉買ひ午後いまだ早きに今日を足らひて帰る③

島 木 赤 彦

浜 梨 花 枝

松 村 英 一

安 江 不 空

長 沢 美 津

柳 原 愛 子

吉 野 秀 雄

島 木 赤 彦

前 田 夕 暮

蕨 櫃 堂

久 方 寿 満 子

竹 尾 忠 吉

沼の水にぶく光りて家めぐる畑の柿の実夕ばえにけり

沼べりに疎籬あつかきかこひこすもすの花さきそめし家ありにけり

沼べりの家に五月さつきの鯉のぼり立てたるが見ゆ舟に遊ぶに（朝雲）

沼べりのここの家は土間近く噴井戸湧きて家ぬち明るし

沾ごろも家にやらばや道すがら友をうしなふ旅のしるしに

葱さげて家に入る妻を見たりけり淋しきものを見たりと思ふ（新万葉集七）一枝良

猫いらすくらひて絶えし鼠族らか寒き夜ごろの家しづかにて②

猫なでのささやきよりは家ふるはし身を打ちて鳴る雷が快し

猫を飼はば、その猫がまた争ひの種となるらむ。かなしき我が家

猫をさえ憎みて暮す一日ありて吾子なき家に性さがひがみゆく（新万葉集・悲しき玩具）

寢覚めては母をもとめて泣く妹深夜家の風の家をゆるがす①

ねしづまる家にかえりぬ庭笹の葉末の露の地におつるおと（秋風抄）

いへ

佐佐木 信 綱

依 田 秋 圃

岡 麓

半 田 良 平

森 鷗 外

一 枝 良

相 良 義 重

阿 部 静 枝

石 川 啄 木

五 島 美 代 子

森 園 天 涙

松 田 常 憲

いへ

ねぢけ人もしおとなはばかたくなのわれはも家にあらずと答へね

三浦守治

熱病みて朝より家にこもり居ることを安しとおもひけるかな②

白井大翼

寝て聞けば遠き女の声にして家降りおほふ秋の夜の雨④

小暮政次

合歓の花うすくあからみ咲きをれり梅雨づく妻の家にやすらぐ①

寺門一郎

合歓の葉にいまださす日のあるさや夕暮はやき山下の家①

君島夜詩

ねむの葉のまろまる早し曇る日のほど遠き家の鶏にわとりきこゆ①

中村美穂

眠らせておきて来し夜のそのままに甲斐ははざまのふる里の家①

米倉久子

眠らんと帰るわが家門よりの飛石は吾の歩幅に合はぬ②

富小路禎子

睡り覚めてただちにおもふわが家に朝餉すらむ母と姪とばかりかも①

村田利明

眠るだけ家にねむりて孤ひとりなるおもひは春のぬくきあかとき③

千代国一

寝るほかにもう雨もない旅の家小用しに出てきいたこほろぎ②

清水信

寝るのみの家運ばるるのみの朝はてしなき日日が擦過して行く(虚像の鳩) 高安国世

念願の明るき家に老いて住み母はいよいよやさしくいます①

黒沢武子

念仏のあふるる家に育ち来て花咲く如く廻向の信は②

中河幹子

農人の家に生れて土を愛で土より更に世の人を愛づ⑬

與謝野寛

野兎の愉しき夢に似てあらん山の家に眠る月の夜④

富小路禎子

野風に吹きとばされまいと山影にしゃがんでる部落その片隅に俺の家も前川葭寿夫

遁れ来し家に坐りて懐中^{ふとこ}をまさぐり出でし歌稿が一つ⑤

浅野豊子

のがれ来しこの故郷も母亡きを兄亡きを知るかなしき家ぞ(現代短歌全集)岡本かの子

軒おほふほほ櫻ふるしこの家の祖ゆひさしき社^{さち}をしおおもふ⑩

安江不空

軒くらき家は昼よりさざめきて三味線を引き女吾を呼ぶ⑥

松村英一

軒下に白粉花の咲きにけり貧しき町の頽れたる家

大塚甲山

軒下に蕨束ねて売る家のどこか笥の水音ひびく⑤

若林牧春

軒ちかく突出でし山木伐られたり冬陽は家にあつまるとし①

寺門一郎

いへ

いへ

軒続き粉挽く家のモーターの夜すがら鈍ししばしば目覚む(朝日短歌二)

岩田 成之助

軒燕ささめく聴けばこの家の庇ゆたかに人好々と③

岡本 大無

軒並の家を裏側より覗かしめ速力落しつつ汽車が街に入りぬ①

荒木 暢夫

軒並めし眼下の家の洗濯物^{すすぎもの}白くなびきて夏さりにけり①

大熊 長次郎

軒による馬のむれより家のうちへ寂しくにはふ毛だものの行③

中村 憲吉

檐の芭蕉みぎりの紫苑この朝の霧が吹きつつ君あらぬ家①

大村 呉楼

軒ばまで水田となりし家に咲く葵は水にかげうつしをり①

藤原 東川

軒低き家をめぐらす冬の畑いよいよ清し大根白菜^{おなねはくさい}⑧

窪田 空穂

軒低き島の家並にくひ入りて傷痕は深し「遺族の家」②

中野 菊夫

軒低く格子づくりの家つづき門川の水暗きにひかる⑩

窪田 空穂

軒低く古びし家を守りつつ死なんとすなり我が父と母③

松村 英一

簷庇になつかしく象つものに元師誕生の家が写れり②

白井 大翼

廂^{のき}ふかき家の間にも照りあかる柏のひろ葉みづみづしかも③

軒ふかく巢ごもる鳩にあかあかと海夕照りすきりぎしの家(新万葉集)

軒古りし故郷^{さと}のこの家よ夕映えの野風呂の中にありてしたしさ(多磨二)

野口英世の生れし家がぼろぼろになりて遺れるを翌朝おもい出づ②

のけものの一人男も旅に出て家の恋しくなれるころかな⑧

遺されし幼子^{みたり}三人ならび寝る家に夜更けて我は来りぬ①

残された枝五六輪咲いた銭好きな僧都の家の木蓮の花①

残り火に木を燃^もしつぎぬ真夜さめて久しくわれは家思ひつつ

のしかかる赤土崖の下の家女童ふたりその前に遊ぶ
(支那事変戦地)

野に遊ぶ家の子どもら打つれて夕門かへるか父無しにして⑦

野に近き家の小庭の堀池に菖蒲を植ゑず河骨を植う①

野に見つつ閑かなりける我家や上のですりに毛布干したる

いへ

高橋英子

秋山光夫

浜田勉

大橋松平

釈迢空

加藤淘綾

青山霞村

田中喜三郎

高安国世

島木赤彦

正岡子規

北原白秋

いへ

野の家に木つつき飼ふをめぐらしみ巡礼の子のつれにおくりぬ（玉琴）

井 関 照 子

野の家に昨日見たりし泰山木の花思ひをりこの吹降りに（多磨二）

和 田 宇 田 郎

野の家に疎開しきたり芹のみを一月食ひき食ひて飽かざりき

鹿 児 島 壽 藏

野の家に妻と住みつつ曉に遠く聞こゆる鶏のあわれさ（新万葉集八）

森 本 治 吉

野の家に火をあかあかと一人して心安らにねむり得るかな（馬鈴薯の花）

島 木 赤 彦

野の家の灯りしづかにともりたりうごく霧ありて暴れる月夜（地懷以後）

橋 田 東 声

野の家のめざめしたしも前畑の麦のみどりに今朝ふれる雨（朝霧）

奥 貫 信 盈

野の家の屋根の上に干す唐辛子紅古りて冬に入るらし④

島 木 赤 彦

野の家はサルビヤ燃ゆる眞日さかり我がおとなひに答ふるものなし（多磨二）

女 鹿 三 保 子

野のうへに灯の^{ともしび}ある窓あけてねむれる家よ大^{やすら}き平安③

生 方 た つ ゑ

野の末にわが家見えて霜がれの夕べさびしき道の一すぢ①

佐 佐 木 信 綱

野の中にたまたま一つ家ありて庭に椿の花咲かせたり③

塚 田 菁 紀

野の中の家に住みつきこの秋はこほろぎのこゑ聞かぬ夜はなし

堀内通孝

野のなかの家に夕炊のけむり立ち月照るみちに蟲鳴きいでぬ

氏家信

野の畑に小さき家をたてむなど年毎に思ふつつじ咲くころ㊦

藤原東川

野の花の目に揺れのころ今日をわれ夕暮れにつつ家に来れり㊦

中村憲吉

野の人と山の法師と膝ならべ銀座に遠し我家の灯は㊦

与謝野寛

野の路をまがるとしてはかえり見ぬ杉の木蔭の壁白き家㊦

窪田空穂

登り来て家あるに驚くひたすらに暮るる日脚を追ひて歩みぬ㊦

長沢美津

登り坂の藪なすひろき屋敷内この古き家の瓦危ふし㊦

松井如流

のみしらみ蚊や蠅のみぬ家に住むそれもゆめにて蛋ひとつとる

筏井嘉一

飲井戸の水替へにけりひとりして家守る母のまさきくありこそ㊦

古泉千樫

ノモンハン事件しげき頃満洲機が日に日にとべり我家の上㊦

加納小郭家

ノモンハンに戦つたといふ帰還兵の草を食つたといふ話きいてゐる㊦

矢代東村

いへ

いへ

乗鞍の山に入る日のあかあかと松山の家を照らしけんかも④

暖簾のれん古き陶工の家瓢々乎とあるじ北峰が汲む茶のうまさ①

呪はれし家かと思ふわれの病み子の病み子の病いよいよ重し①

野分して塀倒れたる裏の家にわかき女の朝餉する見ゆ①

野分せる道を病む母負いてゆく祈りの家に患者待ちおる

廃駅の大きこの家道にむかひ表障子をみな閉せりけり

配給品の毛糸のチャケツ身につけて明日は蒙古に入るといふ兵や

背光をもてる仏のこちして見やりぬ家の妻を婢はしたを⑦
(支那事変戦地)

敗戦後いよいよ我の哀憐は深まりまさる家の女に⑤

肺病みて家の貧しさ入院の手続を乞ひて人の来にけり② (現代短歌全集)

肺病める邪教の家に夏は来ぬガラスの盤に赤き魚居て①

梅林のあとにかあらむこの家の前に門なす梅の自然木

太田 水穂

安田 勝子

関 得一郎

正岡 子規

津瑞 亨

宇都野 研

原 真弓

尾上 柴舟

若山 喜志子

吉田 正俊

宮沢 賢治

長谷川 銀作